一人一人の可能性を拓く学級経営に関する研究

―今の自分を知り、高める体験的な活動とその交流をとおして―

前沢町立上野原小学校　教諭　**佐々木　真　澄**

Ⅰ　研究目的

小学校学級経営においては、学級を一人一人の児童にとって存在感のある自己実現の場としてつくりあげることが求められている。そこで、児童に自己存在感をもつ場や自己決定を行う場を多く与え、一人一人の児童が自信をもって自分の力を発揮し、自己実現を果たせるようにすることが大切である。

しかし、本校児童の実態をみると、教師から与えられたことや取り組み方が分かっていることについては意欲的に活動するものの、目標を実現させるために努力したり、自分の力を伸ばしたりしようとするまでには至っていない。これは、児童が今の学校生活に満足してしまっていることや、児童に学校生活上の新たな課題を意図的にもたせ、それに取り組ませようという指導の工夫が十分ではなかったことによると考えられる。

このような状況を改善するためには、児童が今の自分についての見方を知り、こうありたい自分を思いえがき、その実現に向けて行動していく体験的な活動を工夫し、その活動の成果を交流し合わせることにより、自分の可能性に気付かせていくことが必要である。

そこで、この研究は、今の自分を知り、高める体験的な活動とその交流をとおして、一人一人の可能性を拓く学級経営について明らかにし、小学校学級経営の改善に役立てようとするものである。

Ⅱ　研究仮説

小学校において、次のような体験的な活動と交流を行えば、自分の可能性に気付き、一人一人の可能性を拓く児童を育てる学級経営ができるであろう。

(1)　今の自分のよさを生かして全員で取り組む活動

(2)　こうありたい自分を思いえがき、その実現に向けて一人一人が取り組む活動

(3)　活動を振り返り、新たな自分の発見に結び付ける交流

Ⅲ　研究の内容と方法

1　研究の内容

(1)　一人一人の可能性を拓く学級経営に関する基本構想の立案

(2)　手だてにかかわる実態調査及び調査結果の分析と考察

(3)　今の自分を知り、高める体験的な活動とその交流を取り入れた手だての試案の作成

(4)　指導実践

(5)　実践結果の分析と考察

(6)　一人一人の可能性を拓く学級経営に関する研究のまとめ

２　研究の方法

(1)　文献法　　(2)　質問紙法　　(3)　指導実践

３　指導実践の対象

前沢町立上野原小学校　第６学年　（男子４名　女子４名　計８名）

Ⅳ　研究結果の分析と考察

１　一人一人の可能性を拓く学級経営に関する基本構想

(1)　一人一人の可能性を拓く学級経営に関する基本的な考え方

「可能性を拓く」とは､「潜在化しているその子のよさを自分の力で顕在化させていく」ことである。

可能性を拓くためには、現状からさらに自らを高めていくことが求められる。潜在化しているその子のよさを顕在化させるためには、新しいことに挑戦し、新しい自分を見つけていくことが必要である。新しい自分を見つけるためには、今ある自分の姿を知ることが必要である。今の自分を知ることによって、自分のよさが発見できる。そして、どんな自分になりたいのか、何を高めたいのかを考えることができる。さらに、それに向かって行動をしていくことにより、新しい自分を発見することができる。新しい自分、それが潜在化していた自分のよさが顕在化したものと考える。

また、この一連の流れの中に、やってみようとする意識がはたらいている必要があると考える。なぜなら自分のよさを分かっても、やってみようとする意識がなければ次に進まないし、どんな自分になりたいかを考えてもやはりやってみようとする意識がなければ次に進まないからである。したがって、やってみようとする意識があって初めて新しい自分らしさを発見するために行動できるのである。

以上のことから「可能性を拓く児童の姿」の構成要素を「自分を知る力」「思いえがく力」「行動する力」そして「やってみようとする意識」の四つととらえる。これらの要素と意味をまとめたものが【表１】である。

【表１】可能性を拓く児童の姿の構成要素と意味

構成要素	意　　味
自分を知る力	自分のよさをとらえる力
思いえがく力	こうありたい自分の姿を思いえがき具体的な目標をもつ力
行動する力	こうありたい自分の姿に向かって取り組む力
やってみようとする意識	新しいことに挑戦しようとする意識

また、本研究において、可能性を拓く児童の姿を「自分の可能性に気付き、さらに新たな可能性を求めて挑戦をしようとする児童」ととらえる。

(2)　今の自分を知り、高める体験的な活動とその交流を取り入れる意義

「今の自分を知り、高める体験的な活動」とは、今の自分のよさを認識させ、伸ばしていく体験を意図的に取り入れた活動のことである。本研究においては、全員で取り組む体験的な活動【活動１】と一人一人が取り組む体験的な活動【活動２】の二つのことをいう。そして、二つの体験的な活動のまとめとして、交流の場を設定する。新たな自分の発見に結び付けるために行う交流である。

全員で取り組む体験的な活動は、学級全体で一つの課題に向かって取り組む中で一人一人のよさを生かし、意識させていく活動である。そして、学級の中でそのよさをお互いに認め合うことによって一人一人が自信をもつようになり、やってみようとする意識が高められると考える。その高められたやってみようとする意識を基に一人一人が取り組む体験的な活動へとつなげるのである。【活動１】で自分のよさを意識しているので、そのよさを生かしてこうありたい自分を思いえがくことができると考える。また、やってみようとする意識が高まっているので、こうありたい自分に向かって意欲的に

取り組むと考える。

最後に二つの体験的な活動での成果を学級の中で認め合う交流を行うことで自分のよさを客観的に見ることができるようになり、新たな自分の発見につなげ、可能性を拓く児童へと高めることができると考える。また、この交流によって、一人一人が高まると共に、さらに学級という集団自体も高まっていくと考えられる。

【表２】各段階における活動の展開

段階	体験的な活動		交　流
	【活動１】 全員で取り組む 体験的な活動	【活動２】 一人一人が取り組む 体験的な活動	
展開	①自分のよさを知る。 ②全員で取り組む課題を教師から聞く。 ③課題への取り組み方を話し合う。 ④一人一人のよさを生かすように分担する。 ⑤準備をする。 ⑥取組をする。 ⑦教師の話を聞く。 ⑧振り返りをする。	①【活動１】を振り返り、自分のよさを思い返す。 ②こうありたい自分を思いえがき、目標とする。 ③目標にせまるための具体的な取組を考える。 ④取組をする。（一週間） ⑤取組をする日の帰りの会は、振り返りとミニ交流を行う。	①一人一人の活動の状況を発表し合い、お互いの取組を認め合う。 ②教師からのまとめの話を聞く。 ③振り返りをする。

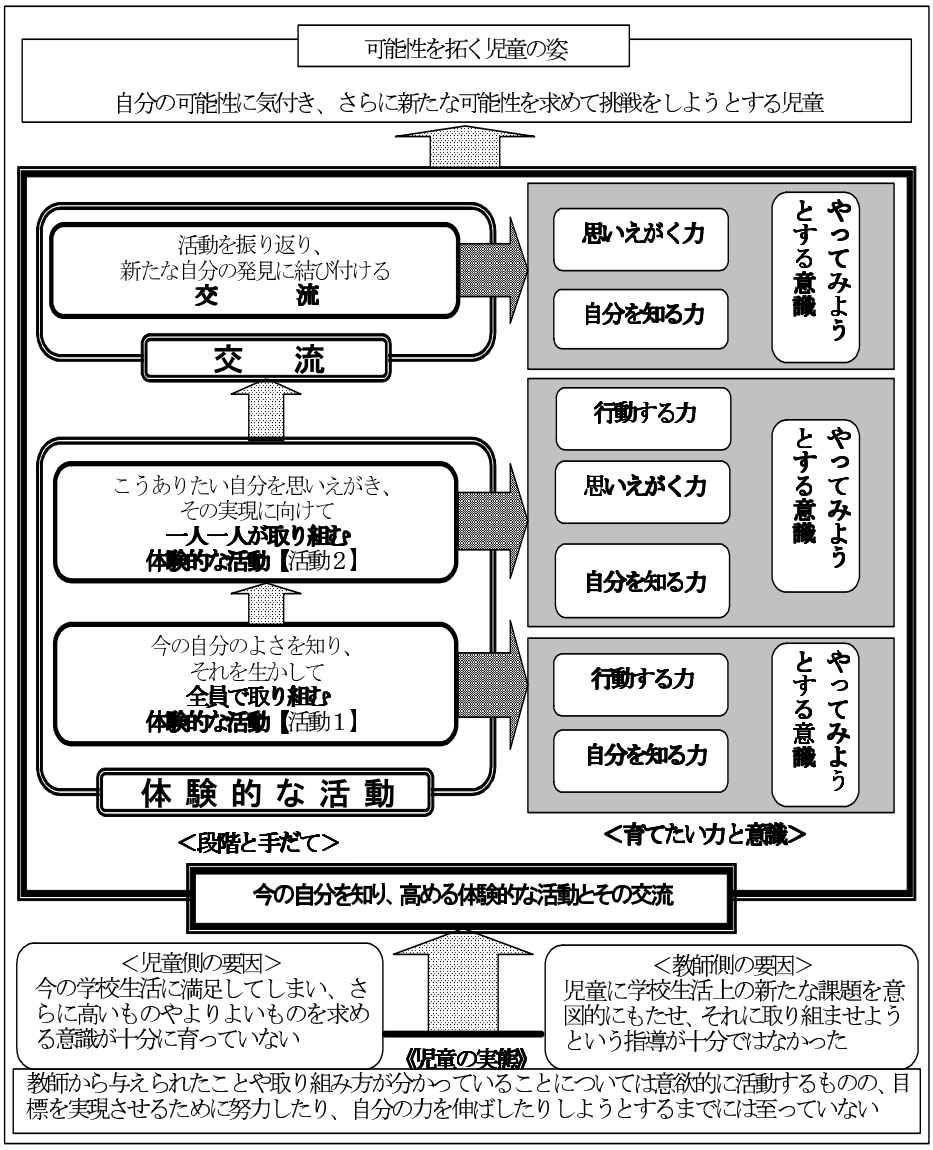
以上のことから、今の自分を知り、高める体験的な活動とその交流を意図的に設定することは、一人一人の可能性を拓く学級経営を行うために意義のあることと考える。

(3)　今の自分を知り、高める体験的な活動とその交流を取り入れた指導の展開

今の自分を知り、高める体験的な活動とその交流の指導過程を次の二つの段階とする。「体験的な活動」と「交流」である。それぞれの段階における活動の展開は【表２】のとおりである。また、一連の活動の中で、児童が意識を連続させたり、記述したものを基に振り返ったりしやすくするために、必要な部分で個人カードを使用する。

(4)　一人一人の可能性を拓く学級経営に関する基本構想図

これまで述べてきたことを基に、一人一人の可能性を拓く学級経営に関する基本構想図を【図１】のように作成した。



【図１】一人一人の可能性を拓く学級経営に関する基本構想図

２　手だてにかかわる実態調査及び調査結果の分析と考察

(1)　実態調査(本資料においては省略)

(2)　実態調査の分析と考察(本資料においては省略)

(3)　実態調査の結果から明らかになったことと手だての試案作成上の留意点(本資料においては手だての試案作成上の留意点のみを【表３】に示す。)

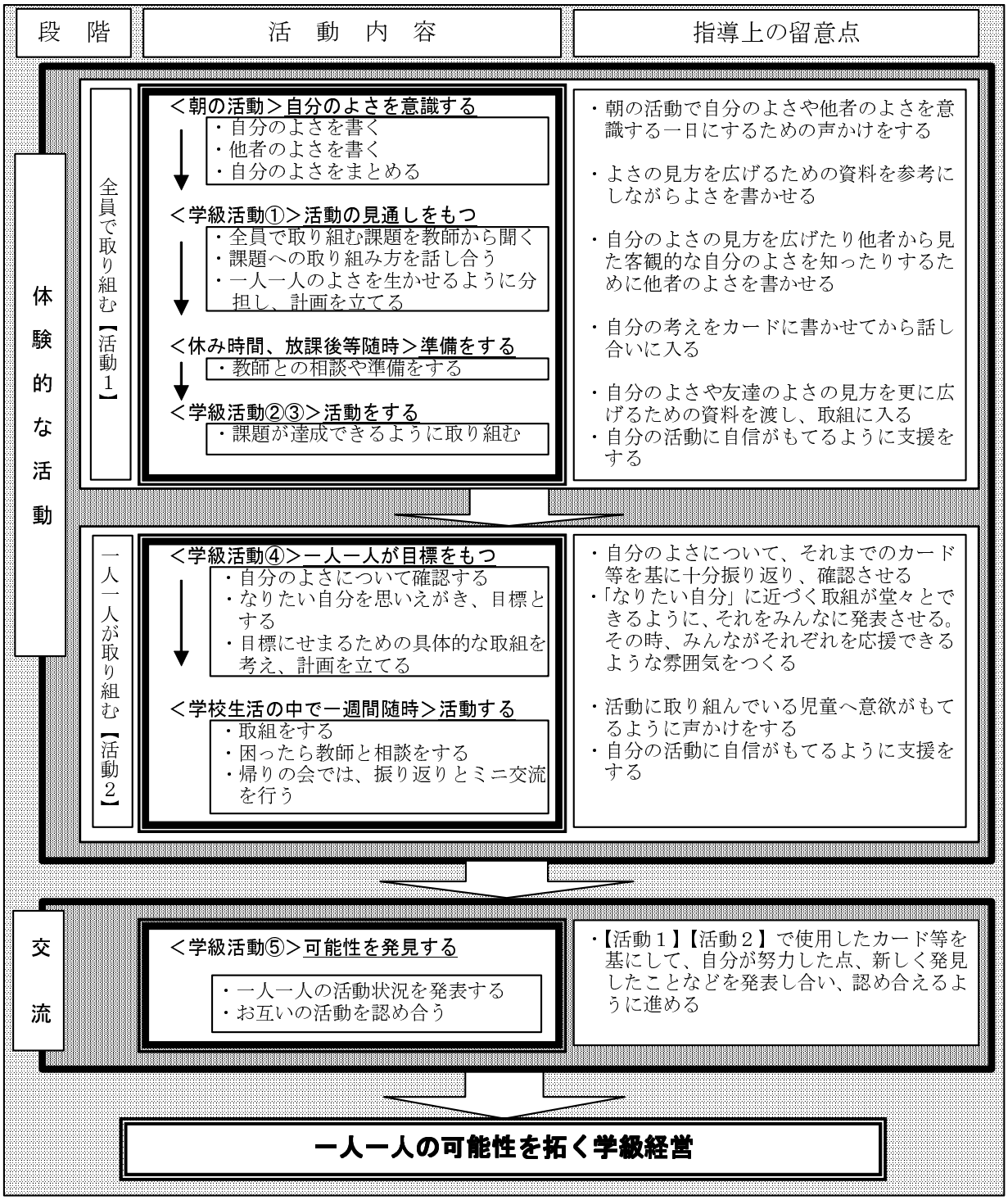
【表３】手だての試案作成上の留意点

・個人カードを工夫し、内容をまとめたり、話し合いをしやすくしたりする ・活動中やミニ交流のときには、児童が自信をもてるように言葉をかけたり、児童相互の認め合いなどを意識的に取り入れたりする

３　今の自分を知り、高める体験的な活動とその交流を取り入れた手だての試案

(1)　手だての試案

基本構想と実態調査の結果を受け、今の自分を知り、高める体験的な活動とその交流を取り入れた手だての試案を【図２】のように考える。



【図２】今の自分を知り、高める体験的な活動とその交流を取り入れた手だての試案

(2)　検証計画及び調査計画

ア　可能性を拓く児童の力の育成状況と意識の変容状況をみるための検証

今の自分を知り、高める体験的な活動とその交流を取り入れた指導についての手だての試案の妥当性をみるために【表４】のような検証計画を作成し、分析と考察を行う。

【表４】可能性を拓く児童の力の育成状況と意識の変容状況をみるための検証計画

検証項目	検証内容	検証方法	処理の方法
力の育成状況	自分を知る力	体験的な活動の中の【活動１】と交流後の自分のよさをみつけ、記録しておくためのカードによる記述の比較	個人カードへの記述内容を分析基準表(この資料では省略する)を用い分析し、考察するとともに、話し合いや活動の様子を観察及びビデオ記録により分析し、考察する
	思いえがく力	体験的な活動の中の【活動２】での自分の目標を思いえがかせ、意識させるためのカードと交流を振り返らせるカードの記述の分析	
	行動する力	活動の様子の観察、記録により分析	
意識の変容状況	やってみようとする意識	質問紙法（評定尺度法）	評定尺度の質問紙法により実践前後に実施し、結果を分析し、考察する

イ　手だてに関する意識の状況をみるための調査

手だてに関する意識の状況をみるために「『今の自分を知り、高める体験的な活動とその交流』についての意識の状況」について事後調査のみ実施し、指導の手だてが児童にどのように受け止められたかを調査する。【表５】は、その調査計画である。

【表５】手だてに関する意識の状況をみるための調査計画

検証項目	検証内容	検証方法	処理の方法
「今の自分を知り、高める体験的な活動とその交流」についての意識の状況	手だてがどう受け止められたか	実践後に質問紙法（評定尺度法）を実施する	結果を分析し、考察する

4　指導実践

(1)　手だての試案に基づく指導計画

本資料では、指導計画は省略するが、本実践で使用する主なカードを【表６】【表７】に示す。

【表６】教師が児童に説明等で使用するカード

名　　称	使う段階	目　　的
よさ発見！お助けカード	【活動１】	よさの見方や観点を広げさせる
よさ発見！お助けカードpart２	【活動１】	よさの見方や観点を更に広げさせる
君の花を咲かせようカード	交　流	自分の可能性を拓くための意欲をもたせる

【表７】児童が使用する主な個人カード

名　　称	使う段階	目　　的
自分のよさ発見カード	【活動１】	自分のよさを見つけ、記録しておく
わたしのよさはこれだ！カード	【活動１】	よさをまとめることで自分のよさを意識させる
自分のよさを生かそうカード	【活動１】	自分のよさを生かした活動を考えさせる
振り返りカードⅠ～Ⅴ	【活動１】 【活動２】 交　流	それぞれの活動を振り返らせる

(2)　今の自分を知り、高める体験的な活動とその交流を取り入れた指導実践の概要

手だての試案に基づく指導計画に従って行った指導実践の概要については６頁と７頁の【資料１】に示してあるとおりである。

【資料１】指導実践の概要

その時間のねらい

主な学習活動

手だてにかかわる学習活動

カード等への児童の記述例

児童の様子と教師の支援

児童の発言、つぶや

補足説明

全員で取り組む体験的な活動【活動１】

朝の活動　8月22日～29日

自分のよさを意識する

①自分が思う自分のよさをカードに記入する

②友達のよさをカードに記入する

③二つのカードを基に自分のよさをカードにまとめる

「わたしのよさはこれだ！」カードの感想

思ったよりたくさんの「自分のよさ」があってびっくりしました。これからも自分のよさをふやしたいです。

22日、25日、27日、29日の４日間の朝の活動（15分間）を使って進めていった。よさを書くのは、難しいようでなかなか進まなかった。

随　時　9月2日～4日

目標を達成するための準備をする

イラスト・カーテン係、丸い机係、Book係、本だなとそう係の４つの係に分かれて、活動当日の完成を目指して準備にとりかかった。

学級活動　9月1日

自分のよさを生かした活動をするための見通しをもつ

①教師が意図的に設定した課題を聞く

・自分のよさを生かす
・全校のために役立つ
＜図書室改造計画＞

②改造の方法を話し合う

③この活動で生かしたい自分のよさをカードに書く

④活動の内容が似ている児童が集まり、計画を立てる

⑤この日の活動を振り返る

・「絵を描くことが得意」というよさを生かして、イラスト・カーテン係ができた。
・「難しいことに挑戦する」というよさを生かして、本だなとそう係ができた。

「図書室改造計画」という課題を提示したところ、児童からは、「やってみたい」「楽しみ」というような反応が多く出された。そして、それぞれのよさを生かした係ができた。意欲を持続し、達成できるように励ましていきたいと考えた。

学級活動②③　9月5日

自分のよさを生かした活動を実際に行

①計画の確認をする

②係りごとの計画に従って、自分のよさを生かすための活動に取り組む

③この時間の活動を振り返る

「振り返りカード」の感想

私のよさを生かせたのでとても楽しかったです。図書室もとっても明るくなったので嬉しいです。

前日までに準備していたものを基に、係ごとに予定していた活動をすぐに始めた。最初考えていたことができなくなった係でも、話し合いながら工夫し、解決していった。

一人一人が取り組む体験的な活動【活動２】

学級活動④　9月8日

一人一人がなりたい自分という目標をもつ

①自分のよさを振り返る

②なりたい自分という目標を思いえがき、「新しい自分に変身カード」に書

③計画を立てる

④目標をみんなの前で発表する

⑤振り返る

「なりたい自分」がすぐ出てくる児童と、なかなか考えられない児童に分かれた。なかなか考えられない児童には、よさを書いたカードを基に振り返らせ考えさせた。一人一人が安心して活動できるようにそれぞれの「なりたい自分」を発表させ、全員に周知させた

随　時　9月9日～12日

一人一人が思いえがいた目標に向かって活動する

「中学校でサッカーが一番うまくなりたい」という目標を立てた児童ａの活動の様子

	活動の様子
9日	中休みと昼休みに練習していたが、集中できていない様子である
10日	中休みは雨天でできなかったが、昼休みは頑張っていた
11日	特別時程のため休み時間がなく、活動できず、残念がっていた
12日	足が痛くなり、外でできない分、図書室でサッカーの本を読んでいた

「振り返りカード」の感想

昼休みはリフティングとシュート練習をした。リフティングでは、14回もできて満足した。

児童は、それぞれが思いえがいた「なりたい自分」に向かって取り組んだ。教室で活動する児童が５名、校庭で２名、その他１名であった。「疲れた」と保健室で休んでいる児童に「疲れがとれたらまた頑張ろう」と励ましたことで、次からは元気に取り組んでいた

交　　流

学級活動⑤　9月16日

お互いの活動を認め合い、新たな可能性を求めて挑戦しようとする意識をもつ

①これまでの活動を振り返る

②【活動１】と【活動２】での取組を一人一人発表する

③頑張ったこと、努力したことなどを認め合う

④まとめとして「君の花を咲かせようカード」を基に教師の話を聞く

⑤活動を振り返り、これからの生活に生かしていく

＜認め合いの例＞

ｈさんは、時間がないところでも、本を読んだりして、頑張っていたのですごいと思

「振り返りカード」の感想

中学校で、サッカーが一番うまくなるという夢をかなえるために、結果につながるように練習を頑張りたい

これまで活動してきたことの中から、努力したことや頑張ったことを発表し合い、認め合う姿が見られた。児童は自分が取り組んできたことに自信をもってきた。さらに、今後の生活の中でよさを生かすことの価値や新しいことに挑戦していくことの大切さを話した。なかなか思うように進めることができなかった児童には、「これをきっかけにして、自分のよさを意識して、多くのことに挑戦していこう」と勇気付け

5　実践結果の分析と考察

(1)　可能性を拓く児童の力の育成状況と意識の変容状況

手だての試案に基づく指導実践によって、学級経営における可能性を拓く児童の構成要素の力がどのように育成されたか、また、意識がどのように変容したのかを検証計画に基づいて分析し、考察する。

ア　自分を知る力の育成状況

【表８】は、学級経営における自分を知る力の育成状況をまとめたものである。

①は、自分を知る力の育成状況を質的な面から分析したものである。質的な面というのは、自分を知る力の深さと考えることができる。より深い部分での自分を知る力が育成されることが望ましいと考える。８名中７名が「A」であり、１名が「B」である。

②は、自分を知る力の育成状況を量的な面から分析したものである。量的な面というのは、自分を知る力の幅と考えることができる。いろいろな方向から自分を見ることによって自分を知る力が幅をもつことになると考える。８名中７名が「A」であり、１名が「B」であった。

【表８】自分を知る力の育成状況

N＝８（単位：人）

①質的な面の分析

基準	児童 a	b	c	d	e	f	g	h
A	●	↑	●	●	↑		↑	↑
B		●			●	●	●	●
C								

②量的な面の分析

基準	児童 a	b	c	d	e	f	g	h
A	↑	↑		↑	↑	↑	↑	↑
B								
C	●	●	↑	●	●	●	●	●

「注」↑は、●からの変化を示し、●は、変化がなかったことを示す。

全体的には、自分を知る力が育成されたと考える。その要因として三つのことが考えられる。一つ目は、個人カードに自分のよさや友達のよさを書かせるときに、その補助資料を提示し、よさの見方を学習させたことである。二つ目は、活動の終わりに書かせる振り返りカードに「新しく見つけた自分のよさ」を書く欄や、「友達のよさ」を見つけたら書くようにさせる欄を設けることによって自分のよさを意識させたことである。三つ目は、交流において自分のよさや友達の頑張りを認め合わせたことである。これらのことから自分のよさの見方が分かったり、自分のよさの量が増えたりしたものと考える。

イ　思いえがく力の育成状況

【表９】は、学級経営における思いえがく力の育成状況をまとめたものである。８名全員が「A」となっている。思いえがく力は、育成されたと考える。

【表９】思いえがく力の育成状況

N＝８（単位：人）

基準	児童 a	b	c	d	e	f	g	h
A	●	↑	●	↑	↑	●	●	↑
B		●		●	●			●
C								

「注」【表８】と同じ

育成された要因は二つあると考える。一つ目は、【活動２】における「なりたい自分」を思いえがき、それに向かって計画を立て、実際に取り組んでみる体験をしたことである。二つ目は、交流において、友達の取り組んできたことを聞いたり、認め合いをしたりすることにより、これからの自分の暮らし方を考えてみたことである。

ウ　行動する力の育成状況

【表 10】は、学級経営における行動する力の育成状況をまとめたものである。

【活動１】では、「図書室改造計画」というこれま

【表 10】行動する力の育成状況　N＝８（単位：人）

月日（９月）／児童	【活動１】 2日～4日	【活動１】 5日	【活動２】 9日 中	9日 昼	10日 中	10日 昼	11日 中	11日 昼	12日 中	12日 昼
a	A	A	B	B	C	A	（特別時程のため、休み時間がなかった。）		A	B
b	A	A	A	A		C			A	A
c	A	A	A	A	C	A			B	A
d	A	A	A	A	B	A			C	
e	A	B	B	B		C			C	C
f	A	A	A	A	A	C			A	A
g	A	A	A	A	A	C			B	C
h	A	A	A	A	A	C			A	A

「注」中は中休み、昼は昼休みを表す。

で経験したことのない活動であったことから、期待感が高まっていたと考えられる。また、共通の目標に対する取組であったことから児童の間には連帯感が高まったと考えられる。さらに、自分のよさを生かす活動ということで、楽しみながら活動することができたので、行動する力が十分に発揮されたと考える。

【活動２】は、一人一人の目標も取り組む内容も違う活動である。９日に「A」が多いのは、取組が始まってすぐで、【活動１】で高められたやってみようとする意識が高い状態であり、計画通り進めることができたと考えられる。10 日と 12 日にばらつきが出たのは、高い意識を継続させるための手だてが十分でなかったためと考える。個々への配慮が必要だったと考える。

これらのことから、行動する力は、改善しなければならない課題は残るものの、育成されつつあると考える。

エ　意識の変容状況

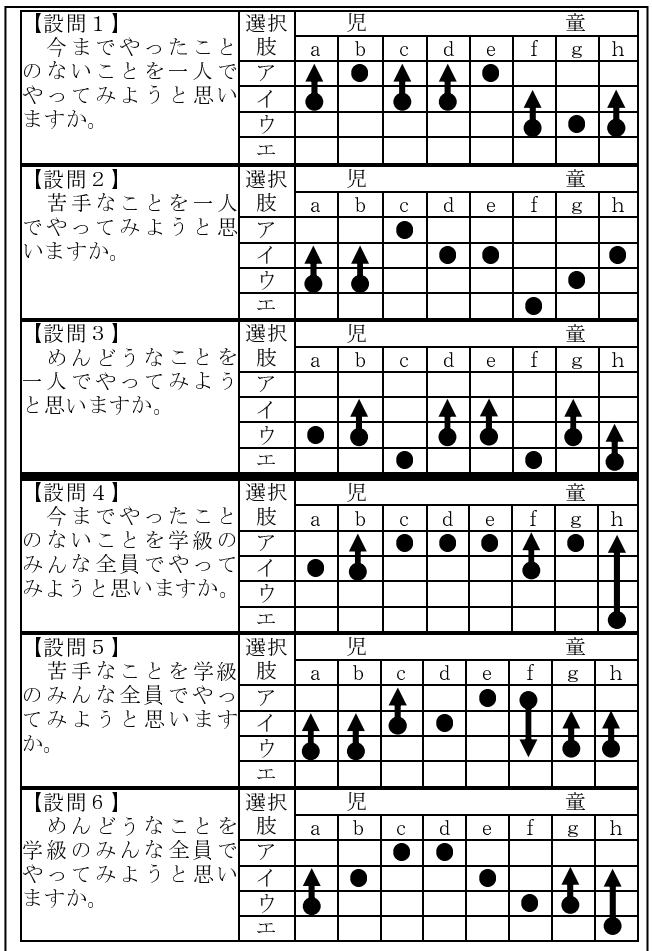
【表 11】は、やってみようとする意識の変容状況をまとめたものである。

設問１から３は、一人で取り組むときのやってみようとする意識の変容を見るものである。本研究における実践は、「よさ」を知ったり、さらに伸ばしたりする活動が中心であったため、「苦手なこと」や「めんどうなこと」でもやってみようとする意識を育てる体験的な活動が不足していたものと考える。したがって、「今までやったことのないこと」へは、意識が高まったが、「苦手なこと」や「めんどうなこと」に対する意識を高めることができなかったと考える。

設問４から６は、全員で取り組むときのやってみようとする意識を見るものである。全体的にはプラスに変容していることが分かる。これは、【活動１】が全員で一つの目標に向かって取り組む体験的な活動であったことから、難しそうに見えたことや面倒そうなことに対しても協力しながら、工夫し、一人一人が自分のよさを生かすことで意欲的に取り組み、達成させたことが要因となったと考える。

【表 11】やってみようとする意識の変容状況

Ｎ＝８（単位：人）



「注」１　選択肢の尺度
ア　思う
イ　どちらかというと思う
ウ　どちらかというと思わない
エ　思わない

２　「↑●」の●は事前調査、↑は事後調査での変容を表している。また、「●」は、事前も事後も変化のない反応を表している。

３　アとイはプラス反応、ウとエはマイナス反応であり、アとエはより強い反応である。

４　事前調査は８月 21 日、事後調査は９月 18 日に行った。

やってみようとする意識の変容について考察すると、マイナス反応の児童がいるものの、多くの児童はプラス反応であった。事前調査においてマイナス反応だった児童も事後調査では、その多くはプラス反応に変容している。よって本実践は、やってみようとする意識を変容させるために有効であったと考える。

(2)　手だてに関する意識の状況(本資料においては省略)

６　一人一人の可能性を拓く学級経営に関する研究のまとめ

一人一人の可能性を拓く学級経営について、成果と課題について以下に示す。

(1)　成果

ア　全員で取り組む体験的な活動、一人一人が取り組む体験的な活動、そして交流を行ったことで、自分のよさや友達のよさを再認識し、自分を知る力が育ってきたこと

イ　一人一人が取り組む体験的な活動の中で、実際にこうありたい自分を思いえがく体験をし、交流の中で友達の活動内容を聞いたり、認め合ったりしたことによって、思いえがく力が育ってきたこと

ウ　全員で取り組む体験的な活動と一人一人が取り組む体験的な活動の中で、実際に自ら行動する体験をしたことによって、行動する力が育ってきたこと

エ　全員で取り組む体験的な活動､一人一人が取り組む体験的な活動､そして交流を進める中で、一人一人が前向きに新しいことに挑戦することを体験することによって、やってみようとする意識が高まってきたこと

(2)　課題

ア　一人一人が取り組む体験的な活動を行うときの目標を、個々の状況に合わせて設定すること

イ　苦手なことや面倒なことにも意欲的に立ち向かっていこうとする意識を育てるための手だての工夫をすること

以上のことから、今の自分を知り、高める体験的な活動とその交流を取り入れた手だての試案は、自分を知る力、思いえがく力、行動する力を育て、やってみようとする意識を高め、一人一人の可能性を拓く学級経営を進める上で有効であると考える。

Ⅴ　研究のまとめと今後の課題

１　研究のまとめ

本研究は、小学校学級経営において、今の自分を知り、高める体験的な活動とその交流をとおして、一人一人の可能性を拓く学級経営について明らかにし、小学校学級経営の改善に役立てようとするものであった。そのために一人一人の可能性を拓く学級経営に関する基本構想を立案し、手だての試案に基づいた指導実践をとおして、手だての試案の妥当性を検討してきた。その結果、仮説の有効性を確かめることができ、一人一人の可能性を拓く学級経営についてまとめることができた。

２　今後の課題

本研究では、一人一人の可能性を拓く学級経営について、指導実践をとおして実践的に明らかにしてきた。本研究をより今後に生かすための改善点として次のようなことが考えられる。

(1)　学校の実情、発達段階、児童の実態を考慮し、今の自分を知り、高める体験的な活動とその交流について、更に検討すること

(2)　年間を見通した学級経営に、今の自分を知り、高める体験的な活動とその交流を位置付け、実践を積み重ね、累積すること

【参考文献】

全国教育研究所連盟編　「子どもの可能性を拓く」　ぎょうせい　1995 年

長崎大学教育学部附属小学校学習研究会著　「個の可能性を拓く学校の創造」　教育出版　2001 年